

第5章

日本語教育支援の方法について (民間支援の留意点、メリット)

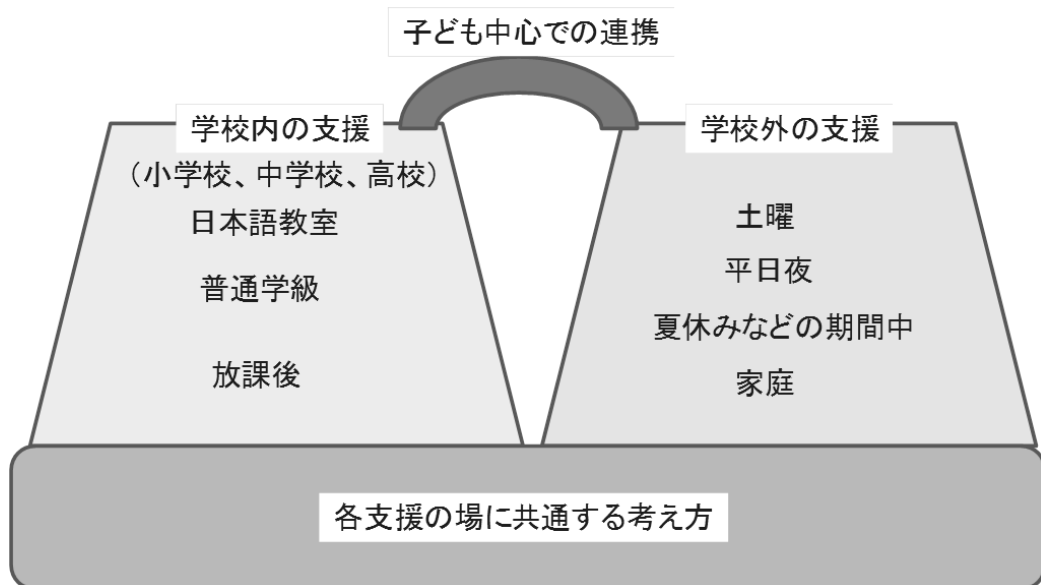
日本語教育の指導法については、多くの刊行物や教材がある。指導法についてはそれらを参照いただき、本冊子では実践現場での気付きや工夫について記載する。

皆さまの実践のヒントになれば幸いである。

第5章の構成

- 5. 1 支援の場所
 - 5. 2 各支援の場に共通する考え方
 - 5. 3 学校内支援:日本語教室
 - 5. 4 学校内支援:放課後
 - 5. 5 学校内支援:学校と支援者のコミュニケーション
 - 5. 6 学校外支援:土曜日、2時間など
 - 5. 7 学校外支援:支援者が育つ実践の場
 - 5. 8 高校受験支援:放課後、学校外
 - 5. 9 学校内のすばらしい日本語教室:事例1 小学校
 - 5. 10 学校内のすばらしい日本語教室:事例2 小学校
-

5. 1 支援の場



支援の場(場所、時)として、学校内では日本語教室、普通学級、放課後があり、学校外としては、土曜、平日夜、夏休みなどの学校の長期休業期間中そして家庭、などがある。

学校内の支援と学校外の支援の連携として実際に出来ていることは、学校内で支援している子どもが学校外の支援にも参加しているケースである。両方の場での支援内容を把握できているので、子どもにとっては連続した支援となり、効果的な学習時間の蓄積が図れる。さらには、両方の支援の場に同じ支援者が行き同じ子どもを支援したケースもあり、この場合はさらに連続性が確保される。

この連携は、高校受験準備のような限られた期間でできるだけ支援効果を出す場合、さらに効果的である。学校内支援で学校側の面接や作文、教科指導の状況を把握しつつ、それとつながる内容で学校外支援も行う。学校外支援の場合、一人の子どもに2時間の支援をするので、子どもは集中して取り組むことができ、面接や作文については特に有効と思われる。

また、来日間もないなどで日本語力がゼロの子どもにとっても、学校内と学校外の支援が上記のようにつながっていることは、日本語学習の時間の効果的な蓄積となる。

5.2 各支援の場に共通する考え方

支援は何でもかんでも教えることではなく、子どもの自律のための後押しである。ほど良い距離感が必要。

自律：自分で勉強できる、友人とコミュニケーションがとれる、日本社会で人生の選択肢を考えることができる

支援者はしゃべりすぎない。子どもが主人公。

学校や日本語教室の先生の教育のしかた・考え方を知る

⇒ あくまでも学校が中心。支援者は何を補えるかを考えて支援する。

子どもの背景を知る(可能な範囲で)ことで支援のしかたが見えてくる。

背景：来日時期

母国を含めた教育歴

家族構成

趣味

得意・不得意科目

将来の希望(進学、職業)

子どもに対する親の期待

学校の先生は子どもをどう見ているか

支援の考え方は、自律の後押しである。勉強について言えば、子どもが自分で勉強できるようになる後押しをする。子どもにとって、支援が不要になることが望ましいことである。

支援の場面でありがちなことは、熱心に支援したいあまりほとんどの時間を支援者が一方的にしゃべってしまうことである。

また、学校に通っている子どもにとっては、教育や支援の成果が学校の場に出ることが、自信につながり、良い循環となる。学校の教育を中心とし、支援者としては子どもの自律のためにどう補えるかを考える。

子どもにとって学校で長い時間を過ごすわけだが、学校外として家庭で過ごす時間も長い。可能な範囲で子どもの今までの教育歴や家庭環境について本人との会話などから知るようにする。家庭で日本語を使う時間があるかないかが、日本語力の向上のスピードや表現の豊かさなどに影響する。

子どものふるまいは学校内と学校外では結構異なる。周りが外国につながりのある子どもが集まっている学校外支援では、自然な振る舞いになりやすいので、子どもが自信を持ち始めているかなどの変化も見えやすい。いろいろな教育・支援の場が、できるだけつながりあって子どもを切れ目なく支援できることが望ましい。

5. 3 学校内支援：日本語教室

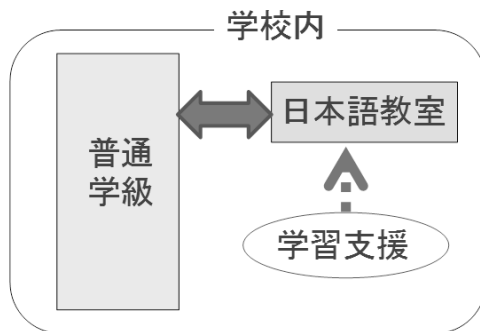
学校内の日本語教室が街の日本語学校と違う点

教科書志向。生徒が教科書の日本語の読解力を身につけることが大事な目標

⇒ 生徒ができるだけ自力で勉強できるようになることを目指す

普通学級へできるだけ早く戻ることができるよう支援

⇒ 普通学級で何を学んでいるか把握を心がける



日本語力がゼロもしくは初期レベルであればあるほど、子どもにとって日本語教室で学ぶ時間は貴重な時間であり、累積時間も1年間でかなりの時間数となる。教え方により半年で日本語力レベルをかなり上げることが可能であるので、個々の子ども毎にどのように計画的に教えるかは、子どもにとっても大変大事なことである。意識的に「学習に使える日本語」を教える必要がある。支援の例は下記である。但し、小学校低学年、高学年、中学校という年齢によっても個別に考える必要がある。

- ◆ 日本語ゼロの生徒の場合：まず「サバイバル日本語」(トイレ、水、痛い、ここ、などや学校のルールの基本につながる場所)を学ぶ。次に、ひらがなを、読む書く話す聞くでひらがなができるよう学ぶ。次に、小学1年レベルの教科書の音読や読解の練習をし、次第にカタカナと漢字もその中で増やして行く。
- ◆ 日本語の話す聞くの会話がある程度できる生徒の場合：読む書くのレベルにより、上述のひらがらから学ぶ。レベル向上に伴い、教科書に出て来る用語や表現を教えつつ、その用語が持つ教科の内容の基礎を学ぶようにする。
- ◆ 教科の学習支援：学ぶスピードよりも、範囲は狭くても基礎になるところをゆっくり学べるようにする。その範囲が理解できれば、それ以外は自分で考えられるようになることが自律には大事である。

5. 4 学校内支援:放課後

放課後支援だからできること

学校の教育方針を踏まえた上であるが、支援者のやり方で支援できる

- ⇒ 生徒1人に対し支援者1人の1:1の支援
 - ・ 生徒のレベルとやりたい学習に合わせた支援
 - ・ 生徒が自分を認めてもらえていると感ずる時間

- ⇒ 気兼ねのない時間
 - ・ 外国につながるのある生徒のみ
 - ・ 成績をつけるものではない
 - ・ 日本語が不十分でクラスで発言の機会の少なかった生徒にとって自分を認めてもらえる機会。自分について話す時間も持つ。

- ⇒ 生徒が自分で勉強する習慣につながる
 - ・ 勉強の仕方を知る
 - ・ 授業でわからなかったところの理解支援
 - ・ 必要に応じ宿題サポート

放課後支援は、支援者のやり方でできるが、学校の教育方針を踏まえることが前提である。実際の例としては、年度初めに学校側と年度の支援方針について打合せ、学校が実施している日本語教室で初期日本語指導を主として行ない、支援者による放課後支援では教科の遅れの大きい生徒を支援するという分担を行なった。もちろん、日本語指導と教科学習指導は相互に関係している。教科に遅れの出ている生徒は、教科書の漢字や用語が理解できていないことが多い。それらを説明する際に、例えば漢字のみを切り出して教えるのではなく、教科の内容の中で教える。授業では聞きにくかった基礎的なことについても支援者に聞くことができることが、生徒にとって理解を実感でき、やる気にもつながっている。

また、放課後は、その日一日の学校の授業を終えた生徒が気持の上ではリラックスしたいと思い、また、日本語が不十分で授業では自分を発揮できなかったことから、放課後支援の場では時間の前後での会話などを通して、本人を認めるということも大事である。生徒がその日の出来事や社会の出来事について大人である支援者に話すことで、自分の気持ちや考えを表現する日本語の練習にもなる。その場合、支援者は生徒の話聞くことを優先することに配慮が必要である。

5.5 学校内支援：学校と支援者のコミュニケーション ～ 信頼関係の構築

支援開始にあたって、どのように支援するかの手すり合わせを行う

支援記録の活用 ... 毎回の支援後に生徒毎の支援記録作成
(支援内容、生徒の様子、使用教材など)

⇒ 生徒毎の個人ファイルを作り職員室に置く
(支援者が何を行なっているかをガラス張りで見えるように)

支援実績について学期末報告書、年度末報告書にまとめ、校長先生との報告打合せを行う

⇒ 問題点の相互の理解と次期の支援のしかたの手すり合わせ
(校長先生に知っていただくことで学校全体による支援につながるように)

学校と支援者の信頼関係を築く基本は、支援活動が学校側にガラス張りで見えることである。具体的には、年度初めの支援方針の打合せ、毎回の支援についての生徒毎の記録を書き職員室にファイルを置くこと、必要に応じ日本語教室担当の先生と立ち話をするなどである。日本語教室担当の先生が兼務の場合は、かなり多忙で話をする機会をなかなか作ることが出来ないが、その場合、教頭先生など誰かコミュニケーションをする人を持つようにするのも一つのやり方である。

校長先生や教頭先生など管理職の方々とのコミュニケーションは、日本語教室の価値を知っていただく意味でも大事である。学期末などの報告以外にも、ちょっとした立ち話がお互いの理解に有効である。

校長先生との報告打合せでは、使用した日本語教材や支援者から見た生徒ごとの日本語レベルの向上の様子、また、学校外支援とつながっている場合はその内容も話をする。それにより、日本語教室を含め生徒の日本語教育が様々な支援の中で行なわれている事を学外者である支援者を通して認識いただく。これも支援者の支援の役割である。

5.6 学校外支援：土曜日など

生徒中心に考え学校の授業とのつながりをいつも考慮

学校外支援でできること

- ⇒ 生徒1人に対し支援者1人の1:1の支援
 - ・ 生徒のレベルとやりたい学習に合わせた支援
 - ・ 生徒が自分を認めてもらっていると感ずる時間

- ⇒ 気兼ねのない時間 ~ 居場所でもある
 - ・ 外国につながるのがある生徒のみ
~ 一人よりもやる気が湧く
 - ・ 生徒が勉強したいことを集中して支援

- ⇒ 保護者と話す機会を持ちやすい
 - ・ 時には保護者から教育相談がある。その場で「三者面談」。

- ⇒ 生徒毎に人生の流れに沿った支援ができる
 - ・ 小学生⇒中学生⇒高校受験⇒高校生⇒(就職面接)
 - ・ 資格取得(日本語能力試験、英検、中学校卒業程度認定試験
高校卒業程度認定試験)

学校外支援では、例えば土曜の午前(小学生クラス)、午後(中高生クラス)の実践がある。集まる子どもは、年齢も日本語レベルも国籍も実に多様である。従って、支援は生徒一人に支援者一人が付く1:1が基本であり、民間だからできる支援である。

小学生クラスと中高生クラスではかなり違いがある。小学生クラスは多くが日本生まれであり日常の会話ができる子が多い。親が日本語ができないなどで、日本語の語彙の豊かさや授業の理解に問題を抱えている。親が心配して連れて来る。年令が低いので、2時間の勉強の集中力持続は難しいので、適度に遊びを入れるなどの工夫をする。

中高生クラスは、生徒自身が勉強が必要であると判断して自分で望んで入室するケースが多い。2時間の勉強を集中して行なう生徒が多い。

また、子どもの人生のニーズに沿った支援もしている。高校受験については。面接、作文の支援に加え、親も含め高校選択情報や受験制度の説明をする。日本語能力試験、英検(特に日本語と英語の変換)、中学校卒業程度認定試験、高校卒業程度認定試験、通信制高校生徒の学習支援などである。それぞれのニーズに合った日本語教育支援となる。

5.7 学校外支援：支援者が育つ実践の場

生徒1人に対し支援者1人の1:1支援なのでじっくり支援を実践できる

- ⇒
- ・ 生徒のレベルに合わせた支援をいつも考える
 - ・ 生徒のやる気アップとなる居場所作りも実践
 - ・ 継続支援で生徒の変化を読み取り支援に反映
 - ・ 他の支援者との切磋琢磨

若い次世代支援者(大学生など)の養成

- ⇒
- ・ 学生の将来の仕事(教員、保育士、心理カウンセラーなど)に役立つ経験や考え方の学びの場
 - ・ 生徒の人生の背景(過去、現在、未来)に思いを馳せることによる教育と社会のつながりを考えるきっかけ
 - ・ 参加している多様な生徒を知ることによる多様性の価値の理解促進
 - ・ 支援リーダーによる指導や他の支援者との切磋琢磨

土曜の学校外支援の事例では、多様な生徒を2時間みっちり1:1で支援するので、支援の場は、実践を通じた支援者養成の場でもある。支援者の半数近くが、元教員や日本語教師養成講座420時間修了など、教育もしくは日本語教育に関する専門性を持った人たちであるので、これらの人と一緒に支援活動を実践することで、支援初心者も次第にレベルが上がって行く。

特に大学生の支援者の場合、教育学部であれば、教員を目指していることが多いので、外国につながるのある子どもを教えることで、日本語の力を原点から考えることになり、また、多様性について実践を通して理解するなど、将来にも役立つと思われる。

民間支援では、支援者の継続的な確保が常に課題であるが、大学生が参加することで、在学年限はあるものの、学年間で活動が継承されてきており、地域の大学と民間支援のつながりによる支援継続性の確保となる。

5. 8 高校受験支援：放課後、学校外

自分を見つめ直し、日本の学校制度の基本を知る 絶好の機会

面接や作文の練習は、それ通して問答をし生徒自身の人生の考えを練る
絶好の機会

⇒ 最初は自分の考えを言えなかった生徒が、「初めて」自分の人生の過去、現在、未来を考えることで、自分の考えが練られ、言えるようになる。

生徒や保護者が自分で進路選択を考えられるように必要な情報を提供する

⇒ 保護者も生徒もそもそも日本の学校制度や受験のしくみの基礎知識を知らない場合がある。その情報を知ること、自分たちで選択を考えることができるようになる。

面接の練習の際、生徒は最初は答えが出てこないことが多い。例えば、なぜこの高校を志望するか、入学したら何をがんばるか、卒業したら何をするか、将来の夢は何か。これらについて問答を繰り返し練習することで、生徒の自身の考えが徐々に練られてくる。今まで、自分の人生について深く考えたことのない、もしくは考え方を知らなかった生徒が、自分を振り返りそして将来について考える絶好の機会である。自分に関することなので、考えるきっかけを与えたり考え方を教えれば、自分で考えることができる。

面接の「定番」の質問は、その意味で、良くできている。過去(自分の生い立ち、中学の思い出)、現在(高校の志望理由)、将来(高校で何をがんばるか、将来の夢は何か)が質問の柱である。これらの面接の質問について、短文を書くことで、作文の「パーツ」にもなり、これらを組み合わせ、ふくらませることで作文を作ることができる。面接と作文は共通することが多い。これをおおいに利用するのが良い。

自分の考えを練ることが大事なので、生徒のレベルによっては、まず母国語で短文を書き出すのが良い。自分の考えをまずまとめることで、日本語への変換も意味のあるものになる。日本語が十分でない生徒に最初から日本語で書かせようとする、自分の考えを練る以前に日本語で立ち往生してしまう。

5.9 学校内のすばらしい日本語教室(事例1:小学校)

取り出し指導による普通授業の遅れが無いように 独自教材で補っている

取り出し指導で通常起きる問題点:

取り出した授業について学習できなくなり、授業の遅れが蓄積する

- ⇒ 普通学級の教科書をそのまま使用して学べる工夫:
教科書の物語や説明文の指導用のワークシートを日本語教室担当の先生が作成。日本語力のない児童が在籍学年の教科書をそのまま使用して学べる。
- ⇒ 担任の先生と日本語教室の先生が連携し、普通学級の教科書の進度・内容を日本語教室の先生が把握。
それに合わせてワークシートを使い指導。

在籍クラスの学習内容に遅れないように指導して欲しいという保護者の気持ちに応え、日本語教室担当の先生が、工夫された教材を独自に作成した。この教材は、教科書の物語や説明文の指導用のワークシートで、日本語の力のない児童が在籍学年の教科書をそのまま使用して学べるように工夫されている。取り組みやすい1枚の分量、手がかりになる言葉、プリントの内容の順序、内容の色分けなどに丁寧な工夫があり、一人でも学べる大変良い教材である。

担任の先生と連携を取り、取り出し授業の分の普通クラスでの進度を把握し、それに合わせてワークシートを使い指導している。

【すばらしいと思う点】

- ・ 担任の先生と日本語担当の先生のコミュニケーションがすばらしい。
- ・ 日本語教室担当の先生が、自分で独自の教科学習の教材を作ったのがすばらしい。
- ・ その日本語教室担当の先生は人事異動で日本語教室担当ではなくなったが、後継の先生がきちんと継承していることがすばらしい。

5. 10 学校内の素晴らしい日本語教室(事例2:小学校)

一斉授業と個別指導の組み合わせで児童がいきいき

通常の日本語教室で起こりがちな問題点:

一人一人の生徒は実に多様なレベルであり、指導する先生は一人では対応しきれない

- ⇒ 小学1年、2年の国語の教科書で、同じレベルの児童をグループにして一斉授業方式を実施。
教科書をPCに取り込み大画面ディスプレイに映して、音読(一斉/句点読み)をしたり言葉・場面の意味などについて児童とやりとりをしたりする。良い意味の競争心が出て、集中できる。
- ⇒ 支援者は、個別の児童の指導にあたる。例えば、一斉授業時に、机間巡視により、書き取りや音読、短文作りなどを指導する。

日本語教室が通常は何人もの多様な児童を1人の先生が見ることの難しさを、なんとかしたいと校長先生は一斉授業方式にすることにした。それを受けて日本語教室担当の先生が、さらに工夫を加えて実施した。

【素晴らしいと思う点】

- ・ 校長先生自らが日本語教室のあり方を従来とは違う形(一斉授業方式)にすることを決断し、実施したのが素晴らしい。一斉授業方式にも一長一短があることも認識して努力を続けている。
- ・ それを受けて日本語教室担当の先生の教え方が素晴らしい。
1時間の中にいろいろ盛り込まないので、ゆったりした時間となり児童が落ち着いて集中して取り組んでいる。アクティビティも取り入れている(例:冬のことばを考えて、文を作り、「冬のことばかるた」作り)。
日本語がほとんどゼロの児童が半年程度で教科書を読めるようになっている。
- ・ 日本語教室で児童たちは笑顔が多く仲が良い。休み時間に日本人も含めた友だちと話す機会が多いようで、日本語の話す力も自然についている。